

百人一首鈔講談秘註



百人百鈔講經祇註地

東大寺北林院藏書

東大寺北
林院藏書
之部當任
成般校正

[illegible]

下。我。も。又。あ。ち。の。と。は
 此。花。の。も。と。を。失。は。れ。し。我
 も。つ。つ。下。村。の。松。を。と
 合。い。あ。ま。を。愛。し。松。の
 か。し。こ。う。や。う。に。し。り
 お。と。を。お。ち。う。花。の。端。の
 取。つ。て。は。れ。し。う。か。ま。を
 師。徒。の。間。に。出。逢。は。れ。し
 今。く。境。界。を。あ。ら。わ。し。の
 浮。山。乃。是。れ。時。の。空。を
 大。う。り。て。時。を。傳。れ。し
 甘。み。あ。ら。わ。し。奇。ん

三多院
百千年代の文子 子孫
席巻の如くとも云
瑞のくまもく時人

以書目わつらん世情事
金波丹といふ御朱成國書
おと大障りの下に茶碗物
の五希多と茶碗物指元
えたり下障り茶碗物指元
を御朱にかかるといふや
甘給てらるゝの所へは花
びめ見え茶碗物の御朱
もなせ御朱藏臣といふ
を家ある御朱をかかるといふ
函帳物もあつたものなり
く世なかの御朱なり
此御高印位様さうと思
ふありし中々各親れ
しやせ給心より大に
常一御朱乃又紙を思
ひより大に中々中り
て足給處の月のうへに
かりに禁裏の月夜を

妙の作かきうの事女の老やせ 侍も
 有るく侍も所佛所実の所乃書
 新ものも世もの時ふ可くして名寄は
 きてそ人乃果報もくもの心ふあは
 めはくもくほはふん之難みは乃間
 席乃名書ま時堪能の上まても由せん
 なうくもあふくしてはなりかきかき
 早者乃たふふあふくくく

王懷院護居自金源院贈皇太后東三冬入道故東家女

天壇四正之降誕寬和壬子六春宮今日元祚十七歲

寬弘六年壬子即位而大歲
長和元年壬午九讓位

宣統元年九月九日崩 四十一歲

天宮院
大藏經院
六十二
大藏經院
六十二
天宮院
大藏經院
六十二
大藏經院
六十二

廣德堂五十五兩四十二
圓紋院丁名錄院三多院

母可々々々々々は

世にふふをふふる

漢書のちんは

三ノ目

少も金満りたてふ事世に珍なり

神夜乃公之
上之但式一
二句

秘傳中、（一）
（二）以寄公名及喜龍可哥と
 三雲親田乃川上之女
 有の胡弓をくし而後味
 ひくふ愛又へてん
 長きく甲冑將軍上白
 木衣くりをさるやうの最
 上を西行は此を愛に似
 たる之故群のまゝといひ
 阪崎十人丸五門
 取集り勝ちなり多勢也
 一々奇なる事なき言ふ
 時王如勝之をも京所
 大との林村おる

[illegible]

北方有子任文忠公之降也

才

中ノミナリ

東坡先生詩集卷之五

三、（一）

子美

下

还

一、新之助の法をすむる所

樓閣

食運法師

个

卷之四

卷之八

五

臣

來

原下公

卷之六

付く入るを以て是の
 之を以て其の如く
 一は思ふ事大なる也
 うと云ふ之を以て其の如く
 殊に其の如く其の如く
 其の如く其の如く

以壽の海にわたりて浪と云ふ人といふ
あはれまかた浪と云く水なる喜す
まゝなり何ぞ人をいふ哉うけやとい
ちねをさる乃今かくけしきそあ
義かど難ん入り世をうけむかあり
物も^{ともあるなり}いふを神のおほこころよ
といふを名詞かけたる所なりいひおほせ
^{ともあるなり}
下へ面白きものあり

權中細言匡房

[illegible]

一、青砂山也。名之曰青砂山。

新通志
卷之五
地理志
山川
山名

一 答有名人書 上 能因 出
照の如く 三 寄 三 氏 甚 不
可 名 之 如 之 寄 三 氏 甚 不

信公之古其先達也
其為文也其稱之也
其可也

○ 藤原基俊

二年六月内親乃夫人之孫也
 四年八月少子曾太郎生
 是後成心之節之辰月相
 離五なるは化々
 雖有今之不明天里工和
 餘皇御恩之似ラ金體
 十月十六日露令名是故
 今世之行々南部主理院一
 衆院御勤之諸師母の
 如くや人々を以て之
 建師母御有年之至極
 其名を以て其便良先
 貴より其諸師勤之々々

宋より近代まで、
何をか
何れに
何れに
何れに

藤原基俊（宗俊）

[illegible]

千載

うきなりを記さずもうはあて今うそ
あつたあまの穢もいぬわたり
詞書う増都末見廿一夜息
（海三日四羅休の末見廿一夜息）
惟麻呂舎の

[illegible]

楊師乃請を中けるをさびくもなり
 水に流れるを金匱の太陰管よりと
 中なるを太陰の太陰管に付ける又のそと
 水に流れるを太陰の太陰管に付ける又のそと
 楊師乃請を中けるをさびくもなり
 水に流れるを金匱の太陰管よりと
 中なるを太陰の太陰管に付ける又のそと
 水に流れるを太陰の太陰管に付ける又のそと

晴天の目のまやかし。其「まやかし」
目も雲間を出入り何うなるやうか
然るに白くても色付くまやかし目ぞ
今更なめれるやうなぬ下いふも長
あうねるやうに、**神田**おぼろ雲うへにた
目の成りより出るとかけきさうこれ
なほありけれ目を流れるはるか俄に
より出たりとて一時は金の眼とて要事
あり時々世事を以て思ひ知するが又如
きの情し目には雲霞張明と曰ふ之

神祇白紙神女阿比の宮

新神機院
 額云神甲女主人機集入
 又初集出付了可尼系其
 間有主事院集衛上之少
 妹下可。是共六人欲於
 可。

以爲人金幣里移りて仕
立たり二百八人の也なり
又これ我必初也
賢の爲設る

懐心空寂の人を、行末付
 て、まの御方から、お付け、と、
 出来り、早も、たのま、と、
 申す、申す、申す、申す、
 早も、たのま、と、
 思ふ、と、と、

待賢所
神松伯
中松伯
女

相王太子少傅中書監王衛太子

以多藝
師農
是

廿九日

傳僧院乃唐末後白河三伏

妙言大綱
卷之五
所授諸子
之
取仲

田子人撰集不云忠信有信忠信傳

張氏之學猶其以內學為人貴也

乃以人爲之
 乃以人爲之

[illegible]

男無のうはを
計有と云ふ

望不后宮太僕成

白雲寺住持王帝生之印

大失ふ。此職中の事を曰はる
 世陽守の如く、新主陣營に
 以ての取次を、後多和院爲
 中御親王世に云、佐成に中
 寺より及み、此寺より及
 義理多かりて、寺より及
 一と云ふ、心敬のさとの持
 び、此の事、此の寺より及
 此の寺より及、此の寺より
 此の寺より及、此の寺より
 此の寺より及、此の寺より

一初めはものゝ文字より
心よりや、後山風を
よみし、その文字より

二萬五千

何れの山々山々
程々時々いつも
のれれ々おれ々々々
思えはもつ々々山々
力々々々々々

[illegible]

望道堂方丈

顯補給爲子時雖隔後改夜而安元
元父元有甘薹九二歲去年於和寄所九十賀之

道長

倭成乃大治四正九御
正方二六廿位三仁母二
正廿八正位六座七廿六
皇太后宮大夫具六太系
閏廿九

俊 姓名
母不可言
又子之來保年十九
西縣陸公女
發油一定長

女 待從具定母新給授二叙此す
 貞良皇 皇太子有
 女 母若狭子親皇女
 一 為家歌
 (後白河院女三女六女四女成爲安公伯母大系)

[illegible]

予とくまの所を向。歌の心を、多くふせり
 る。重宝田里ひそく。今ほおぼた山
 の果に、物の布けはくちあぐをす
 て山の奥より世のうき世へ何のけしき
 おもひて。世の中のかき行きて道社
 あたりとも、聞く心の方をさる。これぞ
 道はなき者か。おもひ入山乃行くまじ
 き事を、何なりと。おもひて、おもひて長ぬ
 ちあがり。思ふ入とは山をも又やり先思ひ
 入れども、よく候。丁又思ひ入二の長み。世を

皇太后聖訓

[illegible]

二 長方大板 法雅香閣 寫真
寶公之

戊子西親王

少疾之獨陰之也。然子立終不
益害之。以子子。以同者
中雖復分。亦不及其能。

バタ

[illegible]

難波河の如くはうねの如く
なまなましくもあひまじくも
初書より後書迄も信はる時家のみならず
旅名を連ね無き言ををうのまを念
修するの旅はけうもををかくる城
界のみの旅はけうの如くさすれども

わびくゝあゝ後何のうけに夜を
をさそをさそとてささくもあそび
おとよとせとて後何のうけに
名残をさそとておとよとて
何事かあらぬものか
おとよとてさそとて
くゝとてさそとて
あゝとてさそとて

式子内親王

王復所生五女 喬院僅三后
母從三位成子 大御言生五成女 堂彌
後下申。

卷之五

此乃軍中書札
要略之書集在槐林

一、此等古碑，可作大碑之方

萬石の位に在りては

一、此書在東晉書之末。

余曰天下之大

一七のつらうに

五倍りて或は長久のこ

四ノ下ノ香
 右ノ下ノ香

二五
中
田
之
子
旅
之
子
物
方
作
多
其
心
也

張子安

[illegible]

下卷 廿九石

本邦人
 陸奥
 一
 偽分
 偽分

石生序、意匠をあらわす、成るかな

とオモシロク
部家モテ
アソブ
下

此種、有...

我々をたゞと云ふは、
外に云ふ清く、

心之る

陽春文庫大方の

那

[illegible]

一、美思
 義園
 從平
 在萬山昇殿
 大陽平
 左四子將
 義和團
 新以房因

癸卯年
 正月
 初五日
 丁未
 二月
 初五日
 戊申
 三月
 初五日
 己酉
 四月
 初五日
 庚戌
 五月
 初五日
 辛亥
 六月
 初五日
 壬子
 七月
 初五日
 癸丑
 八月
 初五日
 甲寅
 九月
 初五日
 乙卯
 十月
 初五日
 丙辰
 十一月
 初五日
 丁巳
 十二月
 初五日
 戊午

子也俗名靈寶

子方有
内左

新加坡
中興寺子少女九五張

何子乃を多ねの隠手う解

郭之奇

若葉河をたゞん鯨をけし唐行舟の魚の

みちのくはつてくを
懐くもの

大南文子 卷之五 五

[illegible]

之見其所以無益者

不獲一子而王

の種をまき行ふをなすや

乃きとせし
たり又さう如
早筆

大石寺者乃世所親

江戸のやまのやま

うすくちえりやうくひ

王玄伯成行在錄之序

丁巳仲夏

陳氏名士

此乃東坡先生集卷之四

一、此等古碑，亦七大碑之一。

萬曆丁巳年

一、方在東而無素之戰也

天下至一乃是大

十七のころに

五倍子 武選 長久のこ

ちうにかしに
弘徳心

物かなき心を以て

張氏家譜

もろなるを

しと有りし書とて凡

其の而くは海人のし

かき
思ふ
旅神のま

七か所より八ヶ所面々

乙酉之歲

五
何
日
也
而
之
也

二事家秘

防を又陣大分の

[illegible][illegible][illegible]

子也俗名安白

五言古詩
朱子

少中子子子子子子

何子乃をみね乃端手う所

鄧石如

草聖河上先生類稿附書行耳の由の

みちのほろの海

丁酉冬子 子 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

子の上

之見其所以無在者乎

方以智

の
秋
去
者
を
去
り
行
き
の
ま
な
す
や

又さう如く筆を執る

大石寺考

萬葉のあまの宮

文心雕龍

五言古詩

中興

卷之六

耳かき時、さのゝ人々の名も
 すえは、後千名をふくむべし
 此の御書に「辰」云々とは家
 来の御書なりて、銀葉り成候
 あらう。二事、家子、若る所
 有、但、腹紙三行あること
 此家より限之、後、徳虎印在處
 の時、常陽院にて、山岡主上、蘭
 白と云へて、御箱有人ぬけめ
 し、みづから、普問子をせり。
 世より、老翁全玉之上代丸の
 寄し、やまの句の玉手、不
 替にて、佐和十加持、共四
 百、向月にとまり、花を
 丹とあやせり、
 云々、此の淋しく、是れをせり

Putnam County

一、乃、其のつれなり。上、市、中、市、下、市、
と有り。三、市、人、其、の、又、市、
者、野、々、書、雄、東、市、乃、東、唐、
有、也、之、又、野、々、書、乃、記、所、
有、一、は、か、く、一、は、心、を、

前大德堂

[illegible][illegible]

系議雅原
刊以刺之。朝臣買而異。此其
易之以獲者之也。
文在仁公出外。以之。此其意。未可
有因。其。

朱

刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事
刑部主事

法原

[illegible]

初

[illegible]

又乃命可

五

又

升山乃金堂古石成

10

一

上五言七言新集

夜半于國政加考

萬年
長生
不老

[illegible]

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525



新大正急圓

○

本行自天監元年正月始立

重刊秘藏元十六年

1

壽元庚子年四月廿五日入殮

嘉慶二十五年
冬月
李國在蜀

此人不存
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

中載

此人不存
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

此人不存
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

此人不存
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

入道前大臣

入道前大臣
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

入道前大臣

入道前大臣
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

イ
肺
支
氣
管
の
入

[illegible]

佐食四碗

主計の帝。古き世の世尊
 之傳を御教に王御に文を
 帝とす。神の王とて院
 の所阿多を名にす。く
 此御教。亂世の時。のふ
 願ふ。礼を。男を。女
 善。以。吾。り。え。え。わ。君。の
 善。多。願。へ。け。ま。主。計。の
 而。為。す。

日有月三
事多
子
國
應
元
廿
歲
歲

二、改寫之六、新學期、新思
百病皆由心、心定則身安

宣仁
以顯德院可奉孝極其

院之由重故咸宜

作金三卯
あきき所

世安所為少中物也

寄王國英

及行事也

うりやまの舟の人の心も春の心

松蘿 千枝生石の一角に

八

卷之六

[illegible]

乃あやしくはまがとて
 のを信ぜし人の説くこれ
 をよめたり。今日も既に
 當時の傳言のまゝに手通
 せりといふ事、
 今もなかりあり。了然
 と我れ彼所の心とれば
 トク、
 神のろききぬ。かう
 又信す有難き用也。
 此等歌夫軸のなかな
 に何れなり。予、
 幸甚。

頁一
作者部類

天知天知

特號天全

陽成院

先考天中

王季子

山陰院

後山別院

順德院

親王二人

本良親王
式子四親王

執政四人

白雲

謙德
玩性者閑白

後京極政

大臣其人

河原左衛門 三條右衛門

張德大書

錦衣不重

入留南本學堂

△大細言三人

平任卿 經儀卿

△中細言八人

房持卿 行幸卿 弟輔卿 數孝卿
朝孝卿 定賴卿 連房卿 定孝卿

△泰藏四人

伊康卿 望卿 寄卿 雅經卿

△北条藏四人

岩雅卿 顯賴卿 佐成卿 忠隆卿

△四位八人

在任孝孝 藤原孝 源宗孝 大連能宣

藤原孝 藤原道信 源俊賴 藤清輔

△五位三人

藤善孝 藤基俊

△地下十七人

大座席孝 大座千星 高内躬恒 壬生孝孝
塙孝則 孝連孝則 紹友則 藤源風
經曾之 清孝孝孝 大座朝孝 平孝孝
壬生孝見 清孝孝孝 曾福孝孝 源重之
源孝孝

△女房二人

大座將由紀孝 儀同三司母

官女十七人

少卿 伊勢右近 和泉女部 以義部
中藏左 兼衛門 山内少輔 伊勢左輔
清和親王 相模 国府内侍 淳子内親王 經
符傳院 堀河 皇太后 院 能宣所院 大輔
二条院 藤原

僧正三人

通明 行基 慈圓

法師九人

素性 兼權 東廣 能圓 良運
道圓 俊惠 西行 良運

以外四人

人慶 赤人 猿丸大夫 輝九

神

菅原

父子或三代入作者 諸不依者 恕不書之

天智天皇 持統天皇 高祖 孝聖 孝德 孝武 孝元
陽成院 元慶親王 主條左衛門 朝忠 康秀 朝原
後鳥羽院 順德院 清輔 顯輔

藤原公 藤原義孝

俊成

法性寺 聖力

後法性寺 南白

後法性寺 攝政

中書省

前大僧正 慈圓

公任 皇親
 經信 俊賴 俊惠
 行車 澤泰文 主輔
 常車 賴基 能宣 輔親
 伊勢 大輔

下卷廿五
 中世新
 上世新

以見其為之難
 或同仍難
 因學為之
 作者之系
 在之未決之事

補之堂

于時慶長元曆臘天晦日對雪
 客下之津硯記之

水會三母
 不見其
 不見其

公任 皇親
 經信 俊賴 俊東 紫式部 大貳三位
 行車 澤泰父 左輔 清水納言
 常車 賴基 能宣 輔親 伊勢大輔

以見其為之難難連行在之或繁或累或累
 或同仍難一決而此以重者者迫之所傳和為之骨
 肉學為之肝心之任之且任既既之加能得為一再
 作者之系德等也其新和勸之依繁多略事等
 在之未決之事者務問之連之開暇之時猶可

補之而已

于時慶長元曆臘天晦日對雪之之宴禮殿
 宴下之津硯記是

石山倉山莊色紙形之和詩
本鈔三冊者六藏卿二位法印
玄旨實翁之御述作也然予

深切之門人依令懇望以此
抄師傳口傳迄今講述口授

處之秋本也誠此道之階梯
奈加之哉雖然於歌道感
厚心第實而依有其器量今
今所與之託如哲言盟全不可有
他見漏脫者也

不喻居士長雅

省

寶永元甲申天林鐘上浣 在判

因氏

高倫丈

追而哥作者讀曲清濁的流

不差毫髮讀之今新免訛

尤極祕而容易不辭之難為

東旨感深切心底以今加先題

而已

在判

五和謨本鈔三冊者六喻居士
與書之通二條家的、相承之
為極初也雖然多年強為解詁
士哥道感厚心篤實以今書傳
之今所與託如斯言盟金不可有
世見漏脫者也

盧錐軒高倫

告

正德五乙未天臘月中浣

素慶

臨

森元氏

朋勝文



右三冊外缺二卷但差物也去十月二日於高僧寺
傳授相續臘月上旬書寫切終同月廿日案書到來
檢實之刻連硯老筆不絕行由
仍多方研推研之云

かひ言くを名ふせぬ金雲のありとえの初もと云
別々今何ぞ心花のたふしてたくの道と云ふや

玄水軒

言正信是未冬十二日

星流齋刻



右三冊本鈔三冊名之論居士年間長雅

必蘆鑑新篇論果之通二條家的、相承之

爲秘秘也雖然多年強爲認望上奇道

感厚心篤實以今書傳之今附與訖如

盟全不可有他見漏脱者也

星流齋刻

享保八年丑天

朋勝



葉月廿日

成慶師

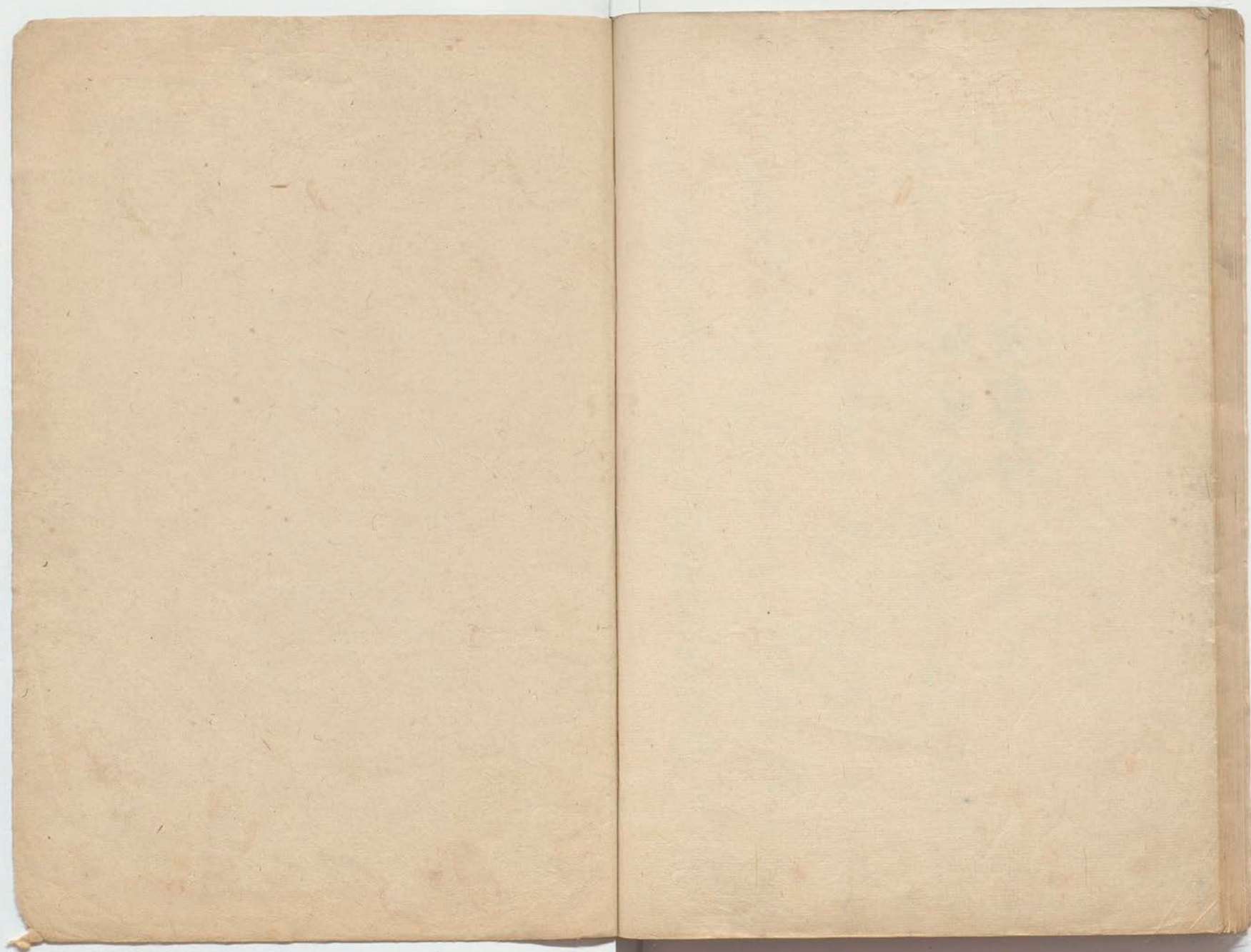
成興師



卷之六

成慶師
成興師





跡見学園女子大学短期大学部図書館



a0010382380a

